



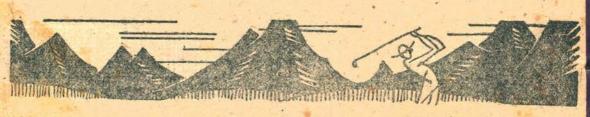


七

No.266

月

號





石

柳

石

あります。 も最も廣く迎えられたようで 折と改題する)、続く類害中で て居り(但し十一篇より燕都技

一の高足たる其角であります ~、これが都会趣味と洒落風

巧的なものが迎へられたの る附合が歓迎されるようにな ちや奇響なる表現を本位とす 人事句に見られる穿 のと見えます。 どして此句集は愛用されたも 迅速なる懐中川の経便手引草 諧運座に於ける附句着想への 体)と云ふ川柳旬がある程訓 これが宝暦年間には、 風窓

で、

この江戸座誹諧の附合の一

りました。

斯くて一句附の技

まして、

は附合を重視するように成り り享保全盛期には、発句より は傳えて江戸誹諸の特色とな

出し」(誹風柳樟拾遺第十七、雑

「黒主は武玉川からぬすみ

ような風潮と和成りました。れて、当座の高点勝句を視う 十七歲の時に当ります。これ が上梓されました。編者は江 して寛延三年「武玉川」初篇 をのみ集録した小冊子が板行 之が前句を略して秀逸の附句句立を主さする風潮に乗じて 、当座の高点勝句を視う本格の誹諧は寧ろ軽視さ 共の魁ミ (炭太 江戸宗匠の十点以上の高点附湖十点の「眉斧日錄」とか、 なり、また一変して川柳となり」 江戸座と成り、紀逸が六玉川体と を圧して居るのではあります か、又は江戸点者廿八人の高句集たる「誹諧 童 の 的」と 天保四年刊に「蕉風が一変して であります。その中でも、紀 等と類書が刊行されて居るの 点附句集たる「訓風金砂子」 理斉随筆」 志賀忍者、 武玉川」が断然それら

されるようになり、

戸座宗匠の一人慶紀逸

と記して居る如く、武玉川の

即ち明和二年に「柳多留」初 蔵で歿しましてから三年目、

篇は体裁までも「武玉川」に

も居るのであります。宝暦十 もあり」と古くから認められて の句にももと武玉川に出たる句で

りまして「柳多留」初篇の序

著)にも「露丸、川柳などが点 爲に「嬉遊笑覽」(喜多村豊節 の句は、「武玉川」三篇にあひあやうい恋の邪魔をする」 が見出されるのであります。 と思われるもの等密接な繋り く、焼直しから、着想の剽窃 文字の違うものは云う迄もな り、之がその儘の柳多留初稿 御参照下さい。例へば「樽拾 されて発表してありますから 12 へ記載されてある等、 で、この二書の類似関係につ 玉川調と川柳調」と題する項 の「川柳雑俳の研究」の「武 T いての今迄の研究が一應集成 就いて麻生磯次博士の近著 居るのであります。この点 一姿は大いに川柳にも影響し <u>-</u> 一 の

諷刺をきかせて居るものであ落の余裕をもち、可笑味や、 趣味は、下世話にくだけ、洒座末流の都会風俗描写の人事 で、申述べたいのであります 暦六年刊)「武玉川」よりは一 ぐために割愛させて競きます が、茲では主題目の考察へ急 居ることを考察して在るの 層実は「柳多留」に影響して 川湖十撰になる「眉斧日錄」 を持つ次第なのであります。 多留」誕生への大いなる要因 角の慶紀逸を通じて「訓風柳 江戸座誹諧の流れは、 (宝歷二年四月、初篇刊—八篇、宝 表裏九行書の句集としてお目 似通つた藍表紙堅小本、 とまれ、これら句集の江戸 私は前述致しました深

ないと存じます。

呼ばれたのは、世界に類例がの表德が遂に一文藝の名題と 成つたのでありまして、 と謂ふ短詩型文藝の呼称とも 点と呼ばれ、後には「川柳 なのであります。それが川柳 載)たる柄井八右衞門の俳号 主(天明四三刊「江戸町鑑」に記 浅草新堀端の竜宝寺門前の名 てあります。川柳とは、江戸は と云ふ点者の表徳が読込まれ すが、それには先ず「川柳」 が述べられてある訳でありま は、「柳多留」の名稱の由 (その一) この初 考究してみるべき段階となつ 集に「柳樽」と名付けたのか 味を汲んで載けばよいのであ たのでありますが、それには ります。然らば何故に、此の句 次の三説が挙げられるのであ いふ文中の「当世誹風 序 個人 Ø

くたらひの如く作りたるを柳椋と る事を匂わせて居ります。 今はひの木さはらの木にて、平た 柳の木にて作りたる手様の事也。 云ふ」とあり、 「貞丈雜記」に「柳樽と云ふは いもせ即ち妻と夫との間柄な の密接なる連絡のあることを もので序文では、当世評風と の標は、昔結婚の時に用いた 喜多留とも書かれて居り、 は柳多留、家内喜多留、 次に「柳樽」ですが、これ 與村政 屋那 此

察を進めて、これに賛したい 徒らに看過せずに、尚究明考

> 等とも誌して居ります。 今に傳られて刊行されて居る 序文に「句意のおしみの余風」が

斯く見來りますれば、中根

てあるのであります。 は古くは内大臣万里小路「惟 れますが、貞文の説に賛した 起源説が「遠碧軒記」に見ら ば木ふやける也、樽にして酒もら 房公の手記」にさへも誌され く思います。酒器柳樽の名称 たから柳樽と呼ぶと謂う名称 樽を始めて用いて、酒を賣つ が、京の柳屋をいふ酒屋で手 とを記して居ります。これ 「松屋筆記」の中で同様のこ は、あの考証家の高田與清も 文は誌して居ります。この事 ぬ故に柳を用ひし也」を伊勢貞 やはらかなる木にして水気にあへ す。「古の柳を用ひと事は柳木は るのは実は誤りなのでありま られるあの角樽と同一視され ます。これが現今よく見うけ き」とあります事が実証され 其の形狀は「平たく 盥の 如絵が描かれてありますから、 「家内喜多留」と樽に書込んだ

あります。 中に読込んだとする説なので けて、撰者川柳の表徳をその と書來つたので「柳樽」と続 次で、ころでは「いもせ川

治四十五年刊―に轉載) と題す ものあり」の意から柳樽と題 れは中根淑氏の「前句源流」 (その!) したとする説であります。こ (明治卅五年三月「文藝界」第一 後に続國民文庫の川柳集―明 一この中にうまき

> であります。 だから故に題となすとするの 酒器の如くその酒を盛る柳樽 あるを引用しまして、滑稽は (藤原清輔著)誹諧を說く條に 詞不二窮弱 | 若二滑稽吐 | ン酒」 と 表された説ですが「奥義抄」 (その三) の見解のようにも思われます を推測するに稍々、穿ち過ぎ されてあるのですが其の根據 きものありとの謎なるべら」と記 付きて斯く名づけ、其の中にうま ります。 る論文中に見られるものであ 滑稽酒器也、言心出」口成」章、 「己が名の柳より思ひ 木村半文銭氏が発

「川柳雜俳の研究」(二六六頁) る。」と述べられてあります。 うといふ説などがあるが、聊 樽の名称を選んだものであら かうがちすぎているようであ あるといふ寓意的な意味で柳 味へばこの中にうまいものが るので酒を盛る柳樽を題にし が、これらに対して麻生博士 たものであらうといふ説やり は「奥義抄に滑稽酒器也とあ 以上三説を紹介しました

て居るのであります。 は牽强附会の説位に考へられ 寓意的で面白い位とし、 説を定説として、次の二説は だが私は、此の木村氏説を 般研究家には、最初の一

> あります。 注に依つて三説が立てられて のでありまして、之が素隱の と思うのであります。 「史記」の滑稽傳に見られる 体、 「滑稽」の字義

絵本小倉錦」を見ますと

此の三から滑稽酒器也と説 一、滑、 滑稽、猶俳諧也。稽同也 流酒器也。 也

兼題 日時 大宝文化会館 「ビヤホール 「海水浴」 八月七日午後 晝 仲之町六八・地下 鉄心系橋下車) (大阪市南区鰻谷 各三句 度 時

場道句作雜川

こそ川柳人の天國です。 もお出かけ下さい。 すから作つた経験しない方 暑さを忘れての作句三昧 柳話や句評なごがありま

あります。

この酒器とは滑稽

れざ酒器也」と紀逸が評され

をその儘「奥義抄」より川柳 説がありますが割愛致します いては江戸時代から諸家の論 と「俳諧」との字義の弁別に就 でありますが、茲では「誹諧」 の意である事も謂われる次第 す。 引用せられたもの と見えま 明せられ、之が「奥義抄」に さて木村氏説の如く、それ 又これから誹諧とは滑稽

す。又可有は「柳樽」四篇の

いると云ふ事も考えられま

て可有が初篇の序文を認めて のであります。その意を含め え方が强ちに附会とも思えぬ められようと思いますこの考 器即ち滑稽と云う考え方は認 が下に立んことなし、句は下戸な 林志)「文章は誹諧の謫仙、普子 す。この本の跋文には(荷簡斉 内容をもつ一本なのでありま す。紀逸の博覽强記を物語る るので、これには誹諧の事の (宝曆四年刊) が流布されてあ あの紀逸の著書たる「雜話抄」 つて説き述べられてありま みならず廣く和漢の故事に沙 は、私は「武玉川」との関係 翁が照合して居るとして、 す。川柳翁の在世時代には、 を手近に考えたいのでありま て筆にのせたと推察するより 川柳の句振を賛えたものとし 落、即ち木綿と号する作家、 の序文を書いた吳陵軒可 (ごりようけん有るべしと洒の序文を書いた吳 陵 軒 可 有 下の櫻木連に属す)が 抄」より「武玉川」の篇者慶紀のであります。引用を「奥義 器即ち柳樽(柳には川柳の意を なのであります。 村氏説に賛したい考察の論 のであります。以上が私の木 関係上より考えて妥当とする が「武玉川」と「柳樽」との 逸の著者よりされたとする方 響かす)であると考察される あり、滑稽は酒器であり、酒 あります。可笑味即ち滑稽で 味あり」と考へられる次第で あり」よりも「この中に可笑 氏説の「この中にうまきも

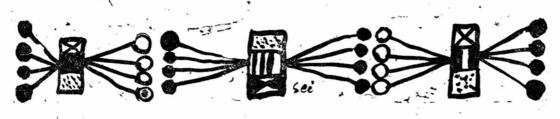
、昭和二十三年十一月十三日、 での口述の要旨を綴る) 廣島文理大学國語研究発表会

女面体儿 塩 野 幾 製 皮下陰射。鏡所

当時としても、柳樽と云ふ酒

見しうる訳でありまして、

酒器と謂ふ使い方は手近に散 の意であります。かく滑稽



生 郎

はゝえめばはゝえむ恋の川田順 俗曲へ六十の父脂ぎり 食卓はきのふのまゝの耽溺よ マッチみなからとなれり人生は トンネルを西すれば大阪に日が落ちる 恋愛至上女の腰の線からも

それがスリの幕と知らずに覗き込み 老眼鏡の妻へ近眼鏡の夫 行儀ただしく住めり子のない夫婦

湯の町の大阪製のスーヴェニア 遙々と來つるものかな湯泉の煙り 麥の秋留守の農家の時計鳴る 共産党はきらひいでゆで歌を詠み

大 西

盛裝の心驕れる靴音や 停電に子の宿題も持ち越され 集團見合とは女房の配給か 「たけくらべ」版画の色に暮れる空

金貯めて富士も箱根も知りませぬ 統制がとかれる頃は賣れぬなり 人の世の姿鰈の裏表

支店長落ちつき拂つて奥に居り ステートフェア婚約の娘を誘ひ出し 普

> 滞納もあつて工場を拡げたり 田

思ひ出の古着薄團の表にし

療養所眼を射るものは松ばかり 五十過ぎ愛妻主義にかたむきぬ レグホ ンの母性を奪して日日

養老院猫と一緒に世話になり 葬式で会つて借錢せめられず

大阪市

市 場

没

子

久し振り遺族に会へば厚化粧 停年に三十年の履歴書く サンマータイム主婦の心と喰ひ遠ひ

大牟田市

高

田

抱

水客君來訪

平和とはつゝじ列車を出すことか 亡き祖母の明治の頃の面影か お互に病身こゝろ一つなり 勤続三十八年の終雨兄勇退

勤続のハシモトイズム燦とあり 大阪の勘と魂身につけて

無邪氣とも何とも尼の笑いあい

これが故郷か船場は舗道なり スリッパの校長とゆう音をたて

無表情なれど工場の取り頭 哇 內 草

俺の友一人殺したあのルージュ 独身よだけど不自由なくつてよ 観光船俺の乘るのは何時だやら

洋裁が出來て失業切り拔ける サバー〜としてよど別居の女云ひ

尼崎市

谷

鮎

美

染めかへの國民服でララランラン

兄の鼻をつまめば妻もくちをあき 手作りの門を建たり隣りの灯 末の子が東京のおばさんを恋ひ チューリツアいま晩酌にふさはしく

家なき夫婦東と西に 湯かげんの好さはしなんしてなんとやらし 大阪市 田 夢

天

横浜市 山 酮

池川市 田 古 方

郞

その拍子バス嬢金をひつたくり 舞妓はん今日はアップで四條辺

大佛も鼻もあぐらをかき給ひ 何をどう喰べたか知らぬ二、三日

妻病み身辺多事

ねむつてるのと違ふか池に糸垂れて 大阪市 Ø.

くたびれた茄子の苗とバスに搖れ 参考に値をきいてみる明石鯛 金庫から石中先生行狀記

柳植えかタて貸ビル拡張す 大阪市 īE. 本

琴の糸小女は深く春に坐し 耳に口つけて話して恋ならず 宣傳ビラのように舞い散る傳書鳩 動くものみんな動いてホームラン

尺八は釈迦牟尼に似た眼をつむり

水

食ひ分があつて飲んでるとこへゆき

幕合の座席で開く加工ずし 滯納の家だに空巢殺生な。 税金の話でお通夜しらみかけ 落ちぶれて氣軽に花を見に出かけ 雑踏へ子は子で來たを後悔し

水 車

田

名古屋市



ふぐで死んだ男の通夜は酒が要り 小娘の覚悟は親をこわがらせ 押して出席して下さる 西日本鉄道人川柳大会に路郎先生無理を (3句

寝ながらの選句へふつ と 涙ぐむ 恋の椅子沖の荒れてる話する 連れだつて春のさなかのまんだら湯 温泉でおかゆばかりを召上り 內 潮

君恋へば人みなすべて恐しく 花つめど摘めど捧げるひともなし 花びらをこぼし電車も春になり 膝少し崩して妓何か読み スポーツニユース聞くは長男ばかりなり **菜の花の道を市バスも通ります**

韓服のインテリらしい女なり 滋賀より大阪に轉入 大阪市

111

春

巢

若柳の池ノ坊のと趣味をかへ

夢に見た大阪え寝て蚊に刺され 大阪の水で今朝から顔洗ふ 金ですむことばつかりの大都会 狭いだけがスイートホームの唄に似る

よく喋りよく喰べて人妻の **弊ふて帰れば盗ッ人這入つた話きヽ** 学会でわざ~~居眠りするも春

奈良縣

崎

方

IE.

下関市

Ш

不

便法は産月程の米を卷き 目高まで腹ひるがへし春の恋 組し易して見たか妓の惚れつ振り いゝ娘カナリヤと云ふ柔かさ いゝ妓三人置いてこちら向き

> 言ひたげな妻の瞳へすかさずどなる 碁も酒も成程强い和尚なり 大阪市

子供歩き出したくいばらの道へ

五月七日法隆寺にて 出雲市 尼

助

飛び乗つて見たい姿で鵞鳥浮き 生活を堀の鵞鳥に教へられ

神戶市

喜

曲

奉賀帳があり金堂は修理中 五月九日薬師寺にて

その見幕に詫びられもせず 今日の出來事を枕に省みる

堂守の話なるほど繰りかえし 同日唐招待寺にて

鹿群れて奈良の五月の景にゐる 奈良にて

一月堂下りる女の裾さばき 火阪市

常着きたまゝで家出の汽車に乗り 料飲再開三味線張り替へに持つて行き

妻に負け子に負けそれでいゝ男

望なきに非ずど夜の花と咲き

老優の頑固嬉しくほゝ笑まれ 延若病床で鉄音

下関市

4

休

悪口も言われて娘の世話がすぎ

恩人を借家に入れて困つてる

定刻は割つたが飲ける口揃ひ 天皇陛下九州路巡幸を迎へて 八代市

4

陛下から慰められて言葉なく

勞働攻

酔拂ひ一人になればおとなしい 迷惑なストへ同情せよと云ひ

スト中止く、歴史はくりかへす 兵庫縣 史

葉

運命の手紙が雨に濡れて着き

王

表札も新婚らしい墨のいろ

兵庫縣

小

西

無

鬼

代議士に夢のないのが哀れなり

綠 之

五月の陽佛像も吸うでおわします

花

リャンハンの絞り苦しき顔の色 七つの子に今日も三軒詫びて來た 後の崇り思いチャンスを作らせず また大きなことばかり云うてと女房

一人足らぬ故に風邪氣味引出され

布施市

門卒

月

谷 竹 莊

税金が親子五人の胃にたゝり 盲判捺しまだその上に役得し アルバイトカフェのプラカードの哀れ 闇煙草追へどもつきぬ味をもち

奈良縣 自 奇 朗

足を組む女は高が知れて見え 公僕となる表札を書き替える

夏の手袋九原則を知つてるか ロングスカートねだつた様な顔でなし

他人ごとのやうに買つてく避姙藥

岡山縣

山 分 北 路

草野球レフト附近に牛がゐる

寝煙草のけむりみつめて明日へ生き 奈良縣 辻 竹

遅参して電車事故かとまた言われ 文学の説明妻にしてもらび 盲判押してしまつた とも言へず 市

光



警笛を牛はお尻で聞いたゞけ 泣蟲の母へ樂しく子は稼ぎ 交渉の程度は他人様の智慧

ペニシリン看護婦さんの眼が笑ひ ついくりの母の眼鏡も尊くて 奉賀帳眞つ先に書いてゐる身分

京都府

間

島

青

丹 子·

親の無い子もあり吾子たしなめる もめごとへ駅長帽子をかぶつて出 雲低く殺氣はらんだ松林 洋裝の癖がふと出る裾さばき 恋人の趣味へ女もとけ込む氣

大阪市 上 田 春

理髪師の女の方へ席をとり 無精ひげそれをみかへる妻であ b

大阪市. 生 梨 里

少うしはうねぼれてゐる話しぶり

御近所の子にアバババをして通 茅屋には作つたやうに見える雑草 酒・ダイヤ・トランプ・ペチカ悪魔が燃える イエス・ノー嘘を知らない歯の白さ 親に似た短氣で職を辞して來る 自己紹介をするにオールドミスですの

先生も出たいと思ふアルバイト 遂げられぬ恋毒薬の名を思ひ 窓口の親切母を喜こばせ ブギウギを唄ふ子もあり幼稚園 大阪市 太 田 良

満月へ金のない事忘れてる 招かれて來たが相変らず無口 夫婦して飲んだ話を友にする ハンサムと言はれゝば又心配し

> 同権を意識して居る口答 誘惑に内証の金が役に立ち

髪の毛をお膳の隅にそつと置き 税金も殺人的と言ふ政治

借りにいて悔みを云うて帰つて來

また寄附か金の成る木はないと云へ 逢へぬ夜は燃える思ひが風となる バスが出て吹殻拾ふ人と知れ

粗

ジャンバルジャンになればと想ふ春 マルクスに疑義あり土の香亦樂 の空

妹の書斎性の本だけ伏せてある 雲雀啼け啼け麦がふくらむよ

なりふりを構わり人と賞められ

覚えてる所へ來たぞお看経 子宝がなくて夫婦で竿を垂れ

好きな娘の噂え口を閉ぢた人 岡山縣

見直した時にはあの娘嫁いでゐ 盗まれたキツスえ病んだ純情さ

己れよりは見事な髭を子がはやし

愛情に変らじ妻の白髪見る

便乗の傘へ女が若すぎる 不機嫌な父が帰つた靴の音

子

勇ましい軍歌が姉を後家にして 吾が胸の小鳥をどこへ捨てましよう 大阪市、 伊

尼崎市 靜 岡

大阪市 江 里

影

君こゝにも段階のある墓標

岡山縣 Щ 弓 彻 平

抱いた子に一々見せる美術展

直 原 七 面

Щ

襟卷の下に人恋ふ乳房がゐ 黑 田 笑

泉

勝

定

美

忠 八

叱られはせぬかと思ふ口もきけ 金沢市 安

Ш

久

留

美

石の重さいつ迄草の根は强し

花の美の埃り話も逢へば盡く のど窓いてはしやがぬ女花を嗅ぎ お握りのめしが一粒春の草

健

何も彼も感心をしてお茶の河鹿降る如し筏師飯にする ファウルえ捕手フラー〜雲を見る 松山市 前 田 伍

悠然と朝飯をぬく事業好き 愛媛縣 席 子

省

安部磯雄著「理想の人」をやきし弟子 大阪市 葭

リ

色艶を鏡へうつす暇もなく POE帰る又もラジオが鳴り出

相談をしてひとしなをはぶ 電線から落ちる雫も後やさき べく膳

よれく、の服を着て居てあやしまれ 大阪市 橋 **I**

浮浪見は私服刑事を見逃さず 清水市 富 土:野 鞍 馬

局の朝サービスといふ糊をたき 貰はれてゆく猫何かいつてなき このごろのマリッキに祖母あきれてる



になるのである。

ハートで作っていた 若

で、その作品はヘッドで作ること

なつているのである。從つて冷た

い機械的な物の感じ方をするの

かないし、

暖か味や熱意が稀薄に

界に接した時、少々のことでは登 世情に通じ、多くの経験から、外 で作るのである。ところが老人は する熱意が强烈なので勢いハート でもないことであるが、大体若い

ートでも作つていることは云うま

人は世情に対して経験が乏しいの

外界に接した時、その物に対

し、ヘッドで作ると云つても.ハ

ヘッドでも作つているのだ

れば老人でもハートで作る人もあ て若い人でもヘッドで作る人もあ

尤もこれは大まかな分類であつ

る。それに、ハートで作ると云つ

それは自然の帰趨であるかも知れ やうになつていることを思うと、 ちにはいつの程にかヘッドで作る

年作家生活を続けているう

生

路

なるやうである。

某誌のS氏などは、もとく

を喪失しないやうに、

つとめなけ

ドでコネ上げた作品を作るやうに 本の詩人は早く老ひ込んで、ヘッ ない。そして外國の詩人よりも日

老人組は後者に多い。 かと云へば若い人は前者に多く、 と才智で作る人とがある。ごつち 川柳を作るのに、心情で作る人

がないらしい。その点例を挙げる の畑の研究に没頭するより外に手 ない。歌人でも俳人でも同じであ までもなからう。こんなことを考 ろ。そうした人達の逃げ場は、**そ** せつけられるからであらう。 た作家の作品をあまりにも多く見 ないと云う議論が出るのも斯うし 最近では全くヘッドで 作ってい が原因をなしているのである。 クされているのも右に述べた理由 住吟一句もなしと云つてヒンシュ るので、その派の人たちからも、 る。しかもコチノトに硬化してい ートで作つていた作家であるが、 そう云う現象は、川柳家に限ら 青竜氏あたりから、川柳に詩で

> 50 道へ外れてしまうと云う欠点があ を捌みそこれて、途方もないわき のと、未経験とから、川柳の眞髄 ればならないだらう。 しかし若い作家は自由を愛する

> > しの强い作家は他人

たら一應振返つて見る必要がある 句だと云うような非難を聞かされ る。君たちの作つているしのは俳 も、その若さがさせるわざであ 君たちは陳いぞと云つたりするの くせ川柳を作っている人たちへ、 境地へ足を踏み入れていて、その 川柳だ川柳だと云つて、俳句

道へ外れるかと云う第 では若い作家が何故そんなわき 一の原因は

らうし、老作家はいつまでも若さ 作をのこしておかればならないだ さないやうに、若い間にウンと力 えると、若い作家はその若さを逃 るのである。 そして天才でない限りは必ず行詰 絶えず新を追求するからである。

> ちにとつては柳俳無差別だと逃げ 句を作っているのである。私た

であつてもかまはない。私たちは

有しているものであると心づかな いのであることは勿論である。押

> と云うのは縁なき楽生だからであ を川柳へ引戻そうとは考えない。

こゝまで來ると、私たちは彼等

うとはしないで、自 に説得する人があ 俳句の相違を合理的 ある。仮りに川柳と ないと突の張るので 柳であるに間並いが 界だから、これが川 分たちの開拓した世 川柳の畑へ引返へそ から注意されても、 つても、自分たちの

形の隣の別へ足を向けることにな る。行詰まつた時に、同じ十七字 尤も隣りの畑が、既に隣人の所

遊船料 (一日に付) 12人類¥4.900 20人類¥5.400

(先夫•漁夫•網付)

★御申込は

川柳であつても俳句作つているものが、

(影损氏右草)

てに橋りつの川陀宇和大

に架けられたつり橋の橋上だ。

五月十五日、午前十一時、近鉄

中村の海神社の前、字陀川の淡流

三本松駅に下車した大阪逓信病院

諸氏で、方正氏は一ト電車先行さ 清堂、流水、惠風、史葉・愛論の り、山間を縫うて、三本松村字滝 川柳会の一行は、このつり橋を渡 柳不朽洞会員である。前日、 れ、竹莊氏は前日竹青居へ出向い て右から、禿天、沒食子、斜水、 良子、純三郎、葉菜子、後列向つ 谷の竹青居へと向つた。 村田流水氏はホノルル在住 前列向つて右から、葭乃、路郎 來川

> 産にならうと同伴したのである。 会にとつても文字通りの珍客であ されたので、 内地の句会もいる

つそううれしいものにした。 風俗漫談を聞いたことも、 催、愉快な集りであつた。 に階上で食事が供され、句会開 この日、流水氏から、ハワイの 竹青居についたのは正午、 鳥ケ辻川柳會の遠出

はハワイだと、これより緩るやか くのだと談された。 な山でも、登山の足ごしらえで行 つた。細い石ころ道を二人三人づ むりに山道は都会人を夢幻境に誘 あつた。鶯の声を聞き、炭焼くけ ム前後して登つて行つた。流水氏 山間の空氣は、新鮮そのもので

(不朽詞主人)



ただいて二、三の話題に花を咲かせた。 風とドシヤ降りの中を女性川柳人に集つて (編輯局)

言葉に就いて

頂きたいと思ひます。 性としての見地から何でも思 らしい婦人役員会であります ことなどからどうですか美奈 つた事をお互ひにお話しして から、この機会に皆さんが女 いと思ひます。川柳界でめづ つた座談会の案は大へん面白 只今葭乃先生が仰言 言葉の

上げると「すみません」と云 げたやうな氣がして変なんで はれると何だが無理に物を上 美奈子 え。「済みません」などと言 たう」と言へばい ゝの にね ふ人があるんですが、「有難 私の近所の人で物を

賀でも言ひます。 きに」と言ふところを「済み で買物をしても大阪で「おゝ 」と云つてお金を受取 済みません」は伊 伊賀では店

のこく帰って來ることがあ

葉= それでもまだ後から

大阪の悪口になりますけど、

の人が集つて居られるから

一つの地方に限らないで各地

関西とか関東とか言って

早やうお帰り」と云ふのと、 むかふの風習です。 美奈子― 〈若菜さんに向つて〉 待つてゐる心持が出てゐて親 と云つた方が御主人の帰りを 養奈子= 朝出勤する人に「お も必ず二遍続けて言ふのが、 しみがあるやうに思ひますね ふのとどちらがいゝでせうね 「行つてゐらつしやい」と云 ります。この「済みません」 乃一「お早やうお帰り

> したけど、もうそれは一寸済 はも少し味のある処もありま

貴女はどう云はれますの? れたことないんですよ。 い」なんて一べんも言つてく こと言ふ間ありませんわ。 意するのに忙しくて、そんな 此の頃だつたら扇子等々と注 丹に新聞、ハンカチ、マスク 注意が一ぱいです。パスに仁 (笑声) それよりも忘れ物の 菜= 私は何も言ひません 林二「行つてらつしゃ

若 香 りますの 林=のこく それでもまだ若い時 だけ余分や (笑声)

す? 葭 乃一定美さんは何と言は けどお母さんは何て言はれま らつしやい」と言ふ人がない れますか? 貴女は「行つて んだ処です。

いね。「行つてゐらつしや 定美| な感じがしますね。 の方が優しみがあつてよろし ゐらつしやい」と言ひます。 たのですがあちらは「行つて じてゐることなのですが…… い」と言ふとそりけないやう 」より「お早やうお帰り 葉= これは私がいつも感 作= 「行つてゐらつしや 私はずつと大連に居

ん」とか言はれますがどうか

せん。 ね。岡山の方は絶対に用ひま のですが、一寸聞けば聞きな ふのは感じよくありません 人のことを言ふのに敬語を用 れはよろしいけど、自分の主 一しはります」とか言はれる 主人が何々しなさつた」と

が.... 香 林= した言葉で仰言るやうです た方は、主人のことを謙 遜 東京のお方でも心得

著 葉= まだひどいのになる 子」と言つて呼び捨てです。 るときでも「何々ちやんが ぼんちやん」とか「小糸ちや と人様に話すのに「うちの小 は母でも祖母でも、皆「美奈 して話しますね。私の田舎で と言って我子をちやん付に ね、大阪の人は他人に話をす 十五年程になるんで すけど **美奈子** 私は大阪に來てから

他人と話をするのに「うちの 氣の張つた人と話すどき以 でも大阪で育つた関係で余程言ふお嬢さんのことです。私 す。糸はんと言ふのは東京でん、ぼん ちや んとか云ひま 男の子だつたら小ぼんちゃ ど思ひます。 ちやんが」とちやん付にして は自分の子供のことを「何

と言つてます。

里一 大連なん

かでした

娘さんになると「お母さん 付けずに呼んでます。それで どか「父ちやん」とか、おを

と言つて呼んではります。 阪でも皆、姉ちやん兄ちやん に名前を呼んでます。 兄さんとか姉さんとか言はず 言ひます。それで子供同志は 里=それは家だけよ、

とか「あんた」とか言つてま 「お母さん」と言はずに「なあ」 どはきまりが悪いので暫くは 若菜 ます。 でも兄や姉に名前を呼ばせて ふやうになりましたけど…… も人前では「お母さん」と言 様に思ひますけど岡山の方は と言ひます。私は何時迄もお までも、一生お母ちやんと云 子供同志は皆同じに妹でも弟 定 美一 大連では「母ちやん」 の間にやら「お母さん」と言 家で「お母ちやん」と言つて かあちやんと言つた方が樂な 行くやうになるとおかあさん ふてますが、 したが、それも変なので何時 へが相当苦勞です。私の弟な つて話をします。その切り変 乃= えょ、だけど家では それに大阪では 岡山では学校

の言葉が多いやうです。 がいには言へないでせうね。 **姜**= えゝ、大体九州方面

思ひますが……美奈子さんの が青年を毒しつゝあるやうに年を毒した樣に近頃はダンス くてはならないのですね。 ならないし、ダンスも習はな 娘さんは洋裁も習はなくては ダンスも良いですね。近頃の 人があります。こんな時には 人でダンス教習所へ行つてる 美奈子= 近所の人で緑談がと ダンス感は如何ですか。 す。然し私は昔カフェーが青 快なことであろう と思ひま で踊ると言ふことは非常に愉 ゝのつてから婚前交際中に一 林= さう云ふのはよろし 敗戰後ダンスが盛

志で踊つてゐるのが感じがよ してゐるのが多いやうに新聞 ふ。中流家庭の娘さんが堕落 の若い女性がダンスを習つて はまあないと思ひます。現在 いと思ひます。 と思ひます。踊るのも同性同 ゐる爲の弊害が相当あると思 ンスを必要とするやうな交際 トとして簡單に習つたらよい 美= 社交的なエティケツ 在= 私達の生活程度でダ

> まつて悪に走ることもあると 段々慾が出て終ひにお金に詰

武器を捨て平和裡に將來國際々見受けました。要は日本がに行く相談をしてゐるのを度 目なダンスをやることが必要ます。この見地に立つて真面 的な社交にたつためにはどう の中で女学生がダンスを習ひ 香 林 一確かにあるね。電車 向があるのではないでせうかダンスを習つてゐるやうな傾 だと思ひます。 してもダンスは必要だと思ひ を習ふのと同じやうな氣持で それからの話ですお茶やお花 は、やはり勉强が第一です。 はいけないと思ひます。学生 菜= 学生がダンスするの

梨 里 然し社交的な意味か 葭・乃= 結局ダンスは社交機 ますが如何でせう。 もなしに愉快に遊べると思ひ が、さつき定美さんは同性同 関として生まれたものでせう でも何でも人の足を踏む心配 ップでもフオックストロット ひます。さうすればワンステ る方がもつと氣分がよいと思 な輪になつて誰とも組まずに 私は日本の盆踊のやうに大き じが良いと言はれましたが、 志で組んで踊つてゐるのは感 一人で音樂に合して踊つてゐ

> どそれでしたら、さつき潮花ら必要なのですから ……けれ 結局ダンスは社交的な立場かがよいのではないでせうか。 ます。鬼に角、今の日本は急に 家庭で樂しむのもよいと思ひ ら休日や夕食後の一と時など は知りませんが、少し踊れた りますが……実は私もダンス 生活水準で必要ないことにな さんも言はれたやうに私達の

麻伊橋武 本美奈子 定 里美

司会 武 內部 潮香

B をそこまで樂しんで踊つてゐ ます。 般化されてゐなかつたダンス なからうと同じことだと思ひ 当にダンスを樂しんでゐる人 開放された形で異性だからと るからいけないのでせう。本 言ふ感情があまりにも强過ぎ いゝでせうねっ **乃= 一人**で踊つても社交 然し日本では今まで一 相手が異性であらうと

> 要するに何時も定まつた常連 る筈です。其処へ集る人達は に親しい交際が出來るのだと ダンスを通じて自然的に本当 す。その点社交ダンスの方が なくともよいことになりま 常連が集まれば何もダンスで それでは一つのクラブを作り さないことはありませんが、 梨 里= 全然社交の意味を成 となるでせうから。 機関としての目的は達せられ

の

直すとこなんかは特に氣の毒 子はネクタイをしめチョッキ何時も羨ましく思ひます。男特に身軽なものですね。私は 此頃は思ひ思ひの色とデザイ 分氣苦労したものですがね。 物を着せてゐるかのやうに隨 行が激しくて私のサラリー を召して上着を威義正しくお ン時代には女房に何時も古 なやうに見えます。又、昔は流 ピストの前でネクタイをしめ ません。汗をかきながらタイ てゐるやうな感じにしか見え れる姿は何と言つても行をし 召しになつて汗をかいて居ら 婦人方の夏の服装は美しくて 林 着物のことですが御

里=、戰時中、 流行はあり

ら言へばやはり組んで踊る方

服は樂ですけど……。 ません。でもデサインを工夫 て長く出來ますからその点洋 ものは短かくてとても着られ た。スカート等昨年あたりの ツボツ流行が復活して來まし すれば違つた布地を継ぎ足し

板に着いて來ましたね。 薬― 此の頃の洋装は 花= 告よくアッパッパと

のですから恰好が悪いのです 言ふのがありましたが、私 和服の方が良いですね。私がはよろしいが奥さんなんかは しいので着るやうになつたも に作られたもので、それが京 若 葉= あれは長襦袢の変り ふのは少なくなりましたね。 す。然し今はアッパッパと云 帰る頃は和服と着替へてゐま ら叱りますと「此の暑いのに 卷をひどいのになると四五寸 行くとアッパッパの下から腰 あれが大嫌ひですよく長屋へ も豊は軽裝にしてゐても私が よく母に言はれますが、家内 さう云ふてやりなさんな」と 嫌ひなので家内が洋服を着た が感じが悪い。若い人の洋装 も川してゐるのがありました

ことは敗戦のたまものだと思 ンで活步出來るやうになつた 美奈子= 服を着て足袋を穿い りましたね。頭は丸髷に結つ たりして……。 ズのまゝ歩いてゐる人があ ずつと昔にはシュ

家 ż 買 2 て

猪口持でばれ

T

吏案外

3

なり

蒸同同同同同同同

毛の風風鈴を鳴ら

す

ひねもすの鉄筆喚きた御佛は厨子の暗さに馴

鉄筆喚きたくなる若さ

ナニ

たまひ

兵

庫

鬼

す

からは我家天井も張らん カン 尼 心崎市 松

惡友も今は 死なれては葬式料がないと云ふ 小金を貯 らし 同

忠魂砕たゝ

の様

15 極

ぶつ

倒 立

ニスコー

ŀ 7>

一組残し日が落ちる

橋の下捨てられた茶に花

か

唉

7

栄

轉

地

L

ばし

北

12

5

兵

が南が

花

女

の友達が出

來て ペン

さゝめ言蚊帳へ今夜の

月も

入 T

何もかも陽氣のせいにしてなまけ はねつるべけなるく春の音をたて 絵の中にいるとは知らぬ農夫なり 同

これはくし息子もべ 親にする遠 慮が 5 や んちゃらうまいなり で稼に H 同同同同

金借りる汗

は冷

4.

ŧ あ

のと くび

知

す

夕焼へ守衛大きく お向ひの鯉で我慢をさ

せ

τ

置

酔ふまではともかく かたい人 ぎし V がられ 八代市 斗四翁

道づれがすりだつたとはだつたゞ 首を吊るほどの抗議は 稅 相談に叔父 珠算が上手で嫁に欲 の 知 性が 横 を向 を 同同

水分

0

涸れたる如

ŧ

金 P

5

てげ 計

廣島縣

泉

一團の少女にてんやわ

処

女性は失いません 避

の姙

同同同同

うすもので 歌

磨描

<

線

となり

飼 ふ人 も豚に 似て來て豚が肥へ 自動車にはねられそうに蝶々飛び

今治市

庫

ざアますに話込まれて

惱ましい線を生かして 舞 台 もめ事がよくよ~多く ニユース聞~ 人絹の赤いド 甘すぎる親の子がするチンドン屋 の 万円当らなかつたビー グスカー 値に僕 ŀ レスで媚び 狐の様にやせている ル 飲む へる の下灯げ 大阪府 间同同同 3 同同同 はち

夢に出る我が身やつばり胸を病み

押し賣りの恋持て余す二

F

我が肋

悄

似

T

滋賀縣

買う時は高いですが下駄を何

も高くつきます。

靴にしても

足も弈き潰すことを思へば結

局安いと思ひます。

たい

らよろしいわね。

姜奈子≡ その点同じ趣味だ

|足绞で妻今日も出る 用

か

あり

どうしたのか 今日は按摩が無口な パン~~と遠ひますよど向き直り

同同同同芳

一つ一つが相当の値段ですか

からの人は和裝はとて

春爛漫寶つたカメラが欲しくなり 先代を話されぬほど落 ボスの家も焼けて溜飲チト つばくろよバラックながら建てたぞく 明 の 英 語 前 後 で 5 年 **:** に L 3 n غ 成 がり 愛媛 媛 賭 旭 同 同 同 同 同 同 童

新

学校の櫻ピ 嫁さがす妻にホ 汽車とバス 百円 拂 病名をにごすと藪にし 瘠せ薬知ら ぬ 医 ルモン射つてやり が 博 0 鳴 父を つてく ŧ 持 5 大 八分縣 表同同同同

月足らずあった手 嫁さがす談しがねむく の C 叱 B I 足 0 n Ŧī. 指 3 大阪市 女同同同同五同同 同

情

断然良いと思ひますが経済的の方が活動的にもこれからは 言ふ事に就いて色々と発言し 裝と和裝とどちらが良いか て居られましたが、私も洋裝 きましたが女の人 人の服装で洋の頭錄音で開 ح

にはどうでせうね。 ふやうに急な物入りですが、 が五千円オーバーが幾らど云 のる人が

急に洋装をすれば靴 里 現在和服ばかり着て

梨

一通りあれば洋裝の方が経済 す。と飛び起きて書きまたりすると飛び起きて書きまる。 すっ たとき等します。 読書をしたり 床に着いてから考へつ それから

物一枚あつても襦袢から帶、的でせうね。和服でしたら着 帶上、帶メ等々を附属品がな ければ着られませんし、その ラデオ等聴いてる手に、人で靜かな時がよろしいの、 いた事があります。 私も夜中に起きて書

うか」と言つて作るときがあす。時によると二人で「作らラヂオ等聽いてる時は駄目で

思ひます。 よいのです。夏の口紅の濃 は香水を少し用ひるとよいと てゐるのも嫌ひです。 れば夏は人前に出るときに 耳たぶに付けると V

経理土がゐますが細君の化粧 のは嫌ひです。 林= 私の友達にお洒落の

桃谷順天

贅沢な部に入つてゐるやうで は敗戦後の日本としては少し てゐるやうです。 これなんか と香水は自分で選ぶことにし すが美奈子さんの説には賛成 いですねっ よりも後の利用法がずつと が少し高く つきますのと和

林二 句 Ø 時 間

すか? 蕊奈子— に忙しくして居られますが 葭 どんな時に作句して居られ b.... 乃 || たり映画を観に行 私は雨の降る日と 女の方は家庭の仕 最後に葭乃先生から 0 3

惡筆 労組 御通過 命日の 住職 猫の仔を貰ふにさえも 練供養導師 その昔のほまれの傷はいえきらで たばこ好き スカート 娘賣つた昔 割烹着これも お見舞の祖 子供追い出して小さな 嫁く日までミシ 疊屋のひやかしでさ 女から大き の丸でお送りしたをもう ラカー 似 に 0 Ø の 口癖 B いてきちんと座 H 琢 中 を ば は をまく 誓 の還歴を祝ふ 花 足 木 刻大工は家 喜 P 部 だ 男 0 母 à お洒落の 積 奉 h 見 ŧ 寢 漕 理 0 0 の を 女 村 ードの っつて坐 \cong 六 迎 で 樣 湯 想 台 h ح 浪 帰 か £ 快調に 旅 0 る 聞 溫 な 8 で す 聞 0 + h 行がしてみたし 危 3 数 根 香 声 貸 3 どり 嬉 カン 言 3 瘠 地 0 額 ž 泉 3 節 しっ 鸥 を 12 を 3 棐 震 を 御 埃 0 3 を ボ 春 で U つ から せ みつづけ 0 15 入 ح 憶 忘 n 残 < で あ 好 降 浴 H 1 0) n 道 6. 7 h 3 n 草 客 3 b 居 b 筋 U 7 腰 小松 今治 佐 今 爲取市 嗣 兒 Щ 治 人縣え 為華 市茶 市 縣余 市 泉 松 同同 同同同 同同同 同 同 同 同 同 同 日 同同 同同 満子 佛 花 風 水 ほろ酔 蟬あつし登記に一と日ぶつつぶし 叱らうど思つてゐたに 老こんで 年期もつと入れろと針が横へす 町内の生え 越して來た 水前寺土産 噛んで吐き出す様に返済して帰り 治つたら來いと見舞に來てくれず 百貨店妻と たまには愚痴も E 薄 近眼ではど顔も見ない 入試すみトランプ占い しはどきを知つて町長 ふと思ひ出したる様に 泥田から上り 凉み舟月に 乘 土の掌を合はせて拜む 芝 の 式 を子 秋 な ع トの廣告だけに 0 都 世 後輩に痛いとこ 覗 來 軸 儲 8 塵 Æ 手 間 拔 凝 i カン ハイヒ ねぬ葬儀費上りよう 女 は け放し L ば 3 電 上 蕊 7: 山 7: げ 5 房 低 7. .b 0 0 そうにこぎ で てほ 嫁 水 庭 春 K 麦 で して暮ら さま辞 声 軒 ぞ の は 彼 夏 で出 女学 突 倒 0) 方 断 ت 8 を が て 視 を 及 未 湧 なる 5 行 察 U あ 住 淋 育 の 來 3 出 カン もり カン かけ 職 3 專 腰 げ U 三原市 岡山縣 奈良縣宇 貝塚 大牟田 熊本縣 大阪市 岐 74 貝塚市 熊 「宮市 阜縣要 本縣 市 茶

同同

鈍

昧

紙を懐へ入れて行つて待つて を持つて行つたとき等鉛筆と ゐる間考へますの、そんな空 す。そんなときや停留所へ傘 錄したりする 白を充すのに非常によろし ればならないことがありま そんなに傘持つて來 か登 勉强になります。いくら自分 よい句をよく読むことが一番 模倣する訳ではな だ句であつてもいゝのです。 り易いです。 と氣分が乗つて來ますから作 が、やはり人の句を読みます

それが何度読ん

だからと言

ので

前に

寸

Щ つて決し

柳を読

同同

千

护

同同

室

久

てもらふことあるかなあ。

だけで作つてゐてもやはり雜

定 美= 私も殆ど夜で中なんですから……。 待つてゐる間に違つた道を帰 の中で考へたり、それに昂奮 定 きて書くのやな。 屋根の棟が三寸程下 世間が寢靜まつた頃……。 つてしまつてゐるこがしよつ いんですよ。 美一 ゆつたりとした電 花= 丑満頃やな 菜 私も殆ど夜です いゝえ待ちぼうけが (笑声) つた頃起 私が 車

同同

IE. 同 庸

司

來ます。 をなつとくがゆくまで説 句か六句位作つてゐて見て下 るのか僕が帰ると何時も十五 したときに雑吟なんかよく出 いと言つて出します。 作 花代子は何時書 z 6 T

同同

ね いよが切つてから作 さ 寸も作りません。 私 どても熱心なんで は編輯や何かで忙 7

同同

瀞

す。 感です。 誌は読まなくては駄目だと思 なんか出來ません。 まり読書は頭を切り変へる が出來ることがあります。 ることゝは全然関係のな は新聞でも雑誌でも読むの つことがありますが、その も考へることのない時間を持 賣の段取を考へてゐると作句 でず。電車に乗つてゐても商 つては全然ないと言ひたい ひます。 林 そうしてゐると読んで 私も作句 梨里 さんの の時間と たまに何 お話 は

高級化粧料容器には断然! 山銀株式會社

草 III

石

てやらないと氣に入 りま

п

兒

窓

から

一法を守り

守

りて

明日知れぬ身へ礼束を抱いている 吝ンボのママを見込んで惚セヒパパ裏街の露路のそのまだ隅の二階借 看板に嘘があらうが壽 司 鮎釣りの講 汚して見せて 賣りをどなり返して 飯 談会記者が帰つてか 奥へ來た氣をさ へ買ふ程 あ 3 山羊伃を産む 釈 父の如 地 聞 氣 だしたゴ F 卵 ij が壽司を賣りがと言う時で ば t 鮎 き老 5 3 を Ą 12 は杉 巡查 0 する < ず木 たり b 代 靴 **愛**媛縣孤 同 石川 愛知縣 姬 路市 縣 光同同 吐同 和同同 同 同 平 郎 光 水

凡槍として 居 H 五煙强 茶室など建てい我が世 韓山 立つ工場に引に傘を買 て行けと云つては見たが困るなり が仔を産むと云かに此の 動悸 過 0 に教えてもらう 疲れ白 3 九州の旅から 間 りました十二月 粉 わ 12 議 な を けに 12 忘 をほめたたへ 父 樱 見る けロ 通 唤 0 T 廣島縣 岩同 今治市伶 大阪市晴 石川縣陽 大阪市葉菜子 同 同 同 司 夫

> サンダルにはち切れそうな足があり 蚊帳の中へ塗放して兒の ほうたいに若葉の色がうつゝてる 疎開先木魚とミシンならん 壽命をば知つてか今朝の 金つまり今日も御布施の貸が出來 ラヴレターポケツトに入れて春が過 ケットが財布代りのいゝもうけ せぬのを淋しがり 窓からキ する女 餓 スをな え 病 薄化粧 打 h で居 Ø め 3 間 V 島根 東京都 奈良縣寬 富山縣三 姬路 香川縣朝 縣侑 市 天 [ii] [11] 同 同 [11] 燕 n 坊 樹 TE. 兒 7 も行難うございました。 ね。今日はこれ位で皆様どう を歩いてゐるときなんかよく 氣分のときがよろしいね。 ですが実行川來ません。 のは駄目です。何時も思うの はやはり句は大急行で作 て居ります。 昔から模倣をしないやうにし に読む結果となりまして私も 菜= 私がつくづく思うの 花― やはりゆつたりした

待合所美人 と 見に乳を飲ますに何をはゞからん 最後かと思へば念を入 おとなしいからと女房に笑はれた 間借りして追從許りの 盗電をうやむ 五十銭紙幣が 鈴 添ふて写せば のリ ズムが 並 やに 風とた び、氣 誘 恋と間 ある夕凉れ n 人となる おくれす て診る 違 3 3 n 大阪市 大阪市 愛媛縣 香川縣迷 M 神 Щ 戶 縣湖 市花代子 桃同 同 月

> 不 朽 洞 會 か 5

下関市勇 宇部市金 兵車縣蒋 愛知縣竹 鳥取縣夕 大阪市小 大阪市文 市不一 登 ふじえ 路郎 雅子 雄 穗 院されたが手術後の経過は良好と が六月十六日に今宮市民病院に入 お迎えしたい▼土井文蝶氏の今間 不朽洞会はあたたかい心で同氏を はないかをおそれている。 島のやうな悲哀を感じられるので とのこと、 船かでハワイを引揚げ帰朝される 老が六月八日の船か又は廿一日の エヤーメールによると、高沢一浪 た▼古川魔花麗氏(ホノル、) 都に福田山雨楼氏を訪問徴 正本水客氏は五月十六日、 今の日本へ帰朝されて浦 幾十年を異國で過され

追

前

見

せる

植

手品師の様に生きてる人も

П

で

同

0

15

b

横

年

古手紙見て居て掃除手

客間に金魚書齋に金魚 夏

5

L

堺

後市万同

居 0 木

3 味 鉢

n

女

8

火车

棐

子の日記父さんが今日のむとあ

東京都

ニュースにも町にも笑ふ両

哗

7

ば b

边上

高知

縣

元

馬

棤

目

t

ij

て

過

1. 下 b <

大

阪

市雁

太郎

(平塚市)

柳会への合流を画されているとの 指導に火童でそのうち川雑女性川 開催されるとのこと▼竹内潮花氏

は日下摘草婦人句会の

帯松の浜辺、

土居で句会を

をあ

T

種にされ

て名士

0

恋

大牟田

風

浪

同権

女らし 遠くに

さを

忘 慾

n

力

U

0

ニッ三ッ

بح

同

孫の手に白髪ぬかせて

老

7=

0

岡

山縣満

年

般若心経読めねこの頃 竹割つた氣性へ反動され 笑ふ子を無口な父も抱

き上

大阪市一

お叩儀した金の威力へに

T p;

ある 笑い げる

出て

大分長くなりました 道 で一時間半漫談的柳話をされた。 大阪警察病院の茨木分院の川柳会 帰られた▼路郎主幹は六月七日 たが、六月に再び郷里の志筑町 水氏(兵庫縣)は暫く在阪されて 柳人の御寬恕を願いたい▼大阪形 ので、貴地は云う迄もなく各地の 訳ではなく、一々お見舞申上げる 騒ぎがあるので神経が太くなつた めているとのこと、各地でも出 となり井戸も十数ケ所飲料に適 から六月二十一日に西町之坪に出 信に接した▼夷一笑氏 場から機械を印度へ向けて積出し 六日雨の中で横浜のメリケン波 の進出を期せられることとなつた 川柳会」を創立され、女性川柳人 会を発展的解消をして「川雑女性 だけの時間的に余裕がなくなつた され印度進出を夢みているとの通 計画実施で多忙 だつ たとのこと 会社の企業再建整備計画の申請 岡村路三氏 浪玲之介氏 (大阪市) 消毒や其他で多忙を極 (山口縣)は七月十 約半数が床下浸水 臨時株主総会や は六月廿

(梨里筆記)

NA NA

中萬字 一玉菊と

Ŧ

説があつて正確なことは期し 勘兵衞抱の名妓で、 に之等を綜合した記事が載せ 難いけれども、 ている。玉菊傳については諸 酒のため夭逝したと傳えられ た江戸新吉原角町の中万字屋 玉菊は享保頃全盛を謳われ 諸藝に達していたが、飲 『新吉原略說 才色衆

線をもてあそび、殊に江戸節を 深く好み、河東節の三絃に堪た かりし。さて、明けくれ琴三味 ぬ隅もなく、いと懇に詞なごか 至るまで、常に心配りの行屈か なく、殊更愛敬ありて、藝者、 かりしかば、其頃全盛ならぶ方 うるはしく、 みしのぶと言へり。此玉菊容儀 女に玉菊といふ有り。恋をしけ の玉菊を褒め心ひかぬかたはな わせしかば、知るも知らぬも此 若い者はさらなり、茶屋船宿に 「新吉原中万字屋勘兵衞抱の遊 其性誠ありて情深

> 達 義 雄

阳

ra o の生れなり。)竟に身まかり 日に亨年廿五歳にしてへこれに り、再び枕に伏して、同月廿九 が享保十一年三月のはじめよ りとぞ。しかるに、二十の年、 よりて推すときは、元禄十五年 心地例ならずして、わずらひし

(玉菊傳・江戸節根元集・近

られたからであり、 が全く其の燈籠によつて傳え もある。 以上も前の女であつたからで いる。と言うのは、玉菊の名 玉菊燈籠の意味に用いられて 玉菊の句の九分通りは、 叉、百年

玉菊は死んだ後までとぼさ 王菊はあかるく廓へ名をの (国)

もつでいるのであるが、二句 ばす」には、 味と共に、生前に於ける「と 「とばす」は火を点する意 破礼的の意味を

取次御注文は

B 6 版

大阪市住吉區万代西五丁肖二五番地

海難一00円

た。記の四

振锋口座大阪七五〇五〇

んだものである。 とも玉菊燈籠を主眼として詠 あかるく光り玉菊が百年忌

玉菊がうせし日より 百年余り 燈籠も百年菊の下祭 「今文政八年乙酉五月十九日 年の年過ぎて建てるなり。」 遊女玉菊之墳記」による (発し、 (元)

は玉菊死後百二十年にもなつ とある処を見ると、文政八年 ていたらしい。(前掲二句のあ 出たのは文政十年。し る『柳多留』九七篇、九九篇の 玉菊が古墳の土地もきく屋橋

浅草新堀端桃雲山永見寺にあ なつている。 つて、法名は菊顔玉露信女と て言つたゞけで、玉菊の墓は ただ玉菊に寄せ Cf601)

残り 玉菊とたそやあかるく名が

漫稿』には誰哉行燈の図を示 取り合わせたもので、 右き玉菊燈籠と誰哉行燈を 『守貞

西田屋の遊女で、その昔、何とある。誰哉は江戸町一丁目 みたるとを必ず之を置く。行燈 と、天水桶上に手桶士ばかり積戸前往來の正中に此 行 燈 一 基 至りて江戸町及び以下妓館毎に 原に、選りて亦之を廃さず。今に 院の戸前に之を建つ。今の新吉 には終夜燈をかゝげて往來を照 「元吉原町にありし時より、毎

> 者かに殺されたことに由來し うになつたとも傳えられてい て、この行燈が立てられるよ

たそや此夜中あかるき五丁町

玉菊の盛りたそやは影もなし (元)

各戸に点じられる玉菊燈籠の 日から一個月間にわたつてい るが、玉菊追善の爲に七月 明るく照らす誰哉行燈ではあ 華麗さにおされて、たそやも 常日頃なら、吉原五丁町を

玉菊と禿菊。

菊の名においらんあれば禿

(二) 玉菊燈籠

で毎年の盂蘭盆に軒につるし 玉菊追善の爲、吉原の茶屋

生 路 郎 蓍 水 武 書 房 版

脉



ある。敢て一読を薦む。 さい出来る。多年川柳してゐる人たちにとつても又好参考書でえば本書を繙くことによつて直ちに川 柳 作 句 のコツを会得するか」から說き起して吹むるところ三十七壽、平明で親切で、初心か」から說き起して吹むるところ三十七壽、平明で親切で、初心か当から説き起して吹むるところ三十七壽、平明で親切で、初心本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新本書は著者が多年のウンチクを傾けて執筆しただけに川柳の新 々噴評好

ビヤホ 1

上六交叉点西北角

年中行事となり、吉原三景容た玉菊燈籠は、後には吉原の 之に就いても、『新吉原略説 の一つとなつたものである。 に追善の発句を手向なごしたるめ其外の人々も來り、これが爲 の水調子といふ河東節の唄ひも なれば、其追義をいとなまんと のものごも、玉菊が三周忌の盆 なしたり。そのころ遊女等を始 せ、揚屋町なる三絃ひき河栄と に出したり。此時、十寸見廟洲 いふものい家にて追善のわざを のを、竹夫人に作りもうけさ 「享保十三年七月盂蘭盆に廓中 仲の町の家毎に、提灯を軒

屋上の詩

須 崎 豆 瓜 秋

な殺伐なことは決していたしませ よくい取りわけお食事については で來て、づるうへべつたりに家族 紹介狀もなにも持たずに轉げ込ん やうで風を捕つて食ふといふやう 人間よりもはるかにお行儀がいる 猫ですが、この猫あんがい素質が になつてしまひました。まだ若い になると屋根へ上り、じいつと茜) ん。風流も心得ています、明け方 迷ひ猫が「よろしくたのむ」と

のさえづりにきょ入つて 居りま こます。 頃になるとのそく降りて來て す、そしてあたりの煙突からほの さす雲の動きをながめながら、 「ニヤー」と朝のあいさつをいた んくと朝餉のけむりが立ちのぼる

ん」と呼んで居ります。 りませんがさしあたり「やね屋 て居ります。まだ名前が決つて居 こうもりの飛ぶ鉛色の空をながめ の頃ともなると又屋根へ上つて、 で寝てばかり居りますが、夕暮れ はよく犬の句を作りましたが、こ 私はかつて大を飼つていた頃 費はたいてい押入のふとんの上

んごは猫の句が作れそうです。

追答の軒端も派手な別世界 別世界は吉原

をとり、すべて水調子をも加へ、

提灯屋名有る女郎を張こて 々歳々玉菊は客をよび 玉菊燈籠を。

女房や娘ども迄も、 其の魅力にひかされるのでな (三)」にし、遊野郎客だけが を、「燈籠も恋の部に入る別世界 なつて砕けよ」と祈つていた 玉菊燈籠の明るさは、 日頃は、 「吉原が微塵に 吉原の盆 吉原

るまい。そこで、 の部に入れずばな 婆では無常な盆燈 **籠も、此処では恋** という有様だ。 玉菊へ手向け煩 女がぞうろぞろ

燈籠見に愚痴な

(H)

歴史をやつて芭蕉

となるわけであー――煩悩即菩提。 ではつと消え お菊と玉菊九ツ 菊の燈籠も九ツ 九ツは十二時 3

原が引け時になれ 燈でないから、 でわつと消え

ば、みな消される。それを番

九枚まで数えて來ると、十枚枚。一、と皿を数え立てるが、物その井戸に止まり、每晩おた。 日晩おれ、一枚二枚三人の井戸に止まり、毎晩おれ。それからは、お菊の怨念 に、とう~~殺されて了つ一枚井戸に落していた十枚一組の皿を、其処に召使われていたお菊とはしていた十枚一組の皿を、はしていた十枚一組の皿を、 町皿屋敷の亡霊お菊に掛けて 詠んだもの。番町に青山と云

是

家作 ポエ柳川 ッ

悩菩提なり

雨 Ш 田

郎、水府、紋太氏ら群雄が控え、 周魚、雀郎氏ら諸豪あり、西に路 ぶべくもない。当代東に三太郎、 に氣を吐いたがいづれも子規に及 若くして倒れ、五呂八も新興川柳 六厘坊、弘美など、云つた天才は 憾ながら子規がまだ出てゐない。 **究では三面子、柳雨を出したが**澄 花坊、久良伎に指を屈し、古句研 う。先す初代川柳をはじめとし劍 なるほごこれらは か。ところで川柳 たところであろう ある。当代では虚 とつづけてゐる。 の方はごうであら 子、井泉水といつ クを割した人々で 俳諧発句にエポツ

る語である。 はじまり、事の起りを意味す りける。」(袖草紙・靑楼雑話) りしが今の燈籠の権與にてそ有 す。さて、此時に提燈を出した 袖草紙と題せり。今まれに存 序跋を添へ册子となし上木して 右の権與というのは、

王菊精監に手向けたが発り 南無玉菊信女さんと初手と (やないばここ

燈籠の夜は手向けん水調子

番町皿屋敷の怪談である。のであつた。これが、所謂、

は言わず、わツと泣き出す、枚まで数えて來ると、十枚

当に知ることである。

家が血を以て関つた四十余年を本

むには、この偉大なるエポック作 の殿堂に参じいのちある句をつか よつてゐる爲体である。真に川柳 跡をただすの選なく、密林にさま 門に入つてから既に二々昔になる 追想したのであるが、自分が路郎 便りの中で『麻生君の元気が羨ま 月中旬三太郎氏からいただいたお 定めることであろう。ところで四 うか。それはいづれ後世の史家が るエポックメーキングは誰であろ しい』とあつた言葉から、病床で もあるが、さて劍伎のあとを訓す 2、常に俗務に忙殺されて師の足 時川柳の全盛をうたわれたこと と云ふ様な傾向に進みたいと思ひす。私の川柳は今後、社会川柳?

にかかりたいものと思つで居りま る葭乃様やリリ様にもいつかお目

ます。この様な立派な句を作られた。娘らしいすなおな句だと思ひ ごよく表現されて居ると思ひまし

> 高利貨煙草二つに切って 宝くじ一枚買つた高 高利貨或る日の言葉やさしかり

利貨

いる

高利貸病めご算盤は なずまじ

高利貨が來て父うちゃんを叱ったの

(東京都・川村好郎) 女房の額を見に帰阪の予定です。 ます。本月末か七月早々に懐しい の、宣傳小唄「内子の四季」春の老妻應募のつもりにて試作せしも相談をうく。私は公募を進言す。和談をうる。私は公募を進言す。 つてきました。

人居てネズミ如きにおごかされ」句ですね。それからリリ様の「一

病人へ聞えよがしに高利貸高利貸一人息子には十く高利貸一人息子にはせれい折鞄の利貸一人息子には廿く高利貸一人息子には廿く

高利貸フト

怖くなる夜の

來橋

私なご撮るスナップが氣の毒な お星様おとぎ話に似て光り」な

声

ら通 拾信 ふか

五月

一と云うものがありません。(横コッく)やつてゐて、横浜には統

入会された御徳强ぶりに敬意を表ぶり、そして目出たく不朽洞会におりません。殊に太田良子氏の毎島めざましく、ただ/~驚嘆の外進めざましく、ただ/~驚嘆の外近めざましく。 りました(路郎宛――大阪・豆秋像の一端もしみん~とうけたまわ「旅人」にもつ藝術家としての憧に拜聴いたしました。先生の句集に。 亜鈍氏との論戦も愉快に有益 縣・阿達義雄) 「他を受験していづれ平民文学を担任教授としていづれ平民文学を担任教授としていづれ平民文学を担任教授としていづれ平民文学を担任教授としていづれ平民文学を担任教授としている時、愚妻ができなかでしたれる時、愚妻ができなができなができない。 「でいてうんと勉强したいと思つて居ります。(熊本・田中辰二)であるがかずの物色に行つたりませらから川柳田大学の活開きをいたと思っている。 関を祈ります。ナ月十四日(新潟関を祈ります。大阪の川柳界の元氣には一寸驚いて居ります。盆々御健ですが、機会ある毎に「川雞」のですが、機会ある毎に「川雞」のかない様ながらできなく。「川雞」のよだには、飛 ひつかない様 ふ程のものもなく、「川雑」や「きには未だ本格的に川柳をやるとい つてゐるので、その点甚だ申しわ のないこと」存じます。こちら 私の書くものは創作 文化や風俗研究が中心とな 者のためで

下さいまして有難う御座いまし

しておきます、西宮市・永江鈍味

ます。 (尼崎・靜岡忠八) 宜敷くお願ひします。

横浜で川柳が盛んになら 当な指導者がないためで、 のは

てゐます。(兵庫縣・小西無鬼) 火変喜んで光栄の至りだと感激し達が早い」と云うのを見せました。

高 利 貸 須 崎 32 秋

高利貸首締められた 夢を 算盤の九々では合はぬ利をとられ 高利貸受取るまでは茶も石ます 利貨故郷へ錦 荒 て帰 二 二 十 5 見 3 えいを 1, H 龙

佳佳 佳佳佳佳

弓わ春育葉 風千醇水薺 白 削 た 平 る 柳 朗 光 石 舟 月 車 花 夢

柳朗光石舟月車花夢穗

・高利貸百円紙幣をす ・何様の屋敷と訊けば高利供・高利貨に暮しの事も教へられ・牛の値を聞いて高利貨笑ひの事も教のよりない。 ・高利貨に募しの事も 高利貸つんぼになって聞きながし 高利貸人間らしく子 を 高利貨或日コーヒとやらを飲 税務署がやつばり怖い 高利 高利貸風の音にも 高利貸じるり箪笥を見て帰お盛んな事でと高利貸吐か 氣の弱い息子を持つ 高利貸ある日 高利貸エレベーターを怖く降り 高利貸たれはどからぬ声となり 高利貨坊 名刺には高利貸とは書いてなし 高利貸何思ふたか世 の会長さんです やと提 新聞寒うよみ 手して別 起き直り からて見 で高計 み貨 れひり 貸 n V È ず ひ貸 豆同 山水門一甦水正庸同錦鮨笑白耕旅五草席美 溪 風美泉子人風郎々司**秋** 楼車王葉光客思司

課 題 於

良

先 針 F. × IJ

野 Ŀ 市

投稿清規

切確▼ 每▼用 は月廿五日▼投稿先本社宛 開催月日及場所記入▼締 紙は原稿用紙▼文字を正

日本ステートフェア 풰 柳大會句 (兼題は前号に発表)

心にかへれと子供汽 車 麻 走 生. 3 路 郎 選

目の前で鯨が射てるあやめ池 南氷洋の鯨へ子供の夢はのび飛行塔幼き頃が懐しき 放心の子と地球儀の 前にいる 父ちやんが先に乗込む子供汽車 大風車子の足許を ステートフェア平和日本を見つけたり 案内図ごこから見よう子沢山 ステートフェア今度は父と來るつもり あぶれてるボートは荒を割って入り 地球儀へ世界の廣さ 意識 する豚の眼にステートプエアの人しまれ ヨークシャ豚の尻尾が陽をはじき ステートフェア迷い子が出て午後になり 貸ボート恋の時間が切れからり 小供汽車汽車に注意の札も立て農業館農民 といふ 眼が 光り 母ちやんは乗り度くはない飛行塔 すこやかに伸びた子を見る遊園地 ヤメ池俺い等。恋がしてみた **塔妻にキッスを投げて見る** 忘れさせ 一黎文失美 青幸久 營 丹 米 子 男雄 花 久 溪子 平 笑光 蝶名水莊

あ子 玉を食べないうちにガムもやり れこれと選ぶ玩具へ親疲れ 供等に鼻っまいて飛んで起き 題 「子ぼん勝」 麻牛 拉 73 0 す 月 選 ぼる 1 南

金ゆうをするお隣りに秋田犬うそだとは知つてて金を貸してやり

九官鳥と留守をする

金倩りる玄関 5びた靴を

ぬのぎ酒

金融の極意を知つて金がな くらしとは別に金融 論を

L <

子ぼん脳またぬるい湯にしてしまい **学藝会何をおいても見に出かけ** 子煩脳迷子の父も泣 いている 子ほん脳二度と出來ない類を見せ 賣喰いにピアノだけはと子煩腦玩具屋の言うなりになる子煩腦 子をだいて春の休みをつかれて來 まだ這へ出子へ靴の買い下 俺に似た私に似たと子をあやし おいたでれなぞとお客へ笑っとき 子煩脳或日女房に利用され 子煩脳注射の針をむごう見る 小兒科で冷やかされてる子煩腦 子煩脳の父であつたと淋しそう 人子に風の熱にもはつとする 車ごいたくと人の 駄べ買い 渦 一零网草湖錦万 葭源竹 雀路貴花方竹 乃坊莊矣光王々花風樂子人 山村正青

金融難何処を風吹く春金融業女社長が煙草金融の術も知らずに停 金融をたのんで女將 酌 金融の術も知 行の貸したい人は借りに 貸して 貰ふ服 被裝整 を へる 布 する の喫年 部 幸 奈良正 男 雀潮愛竹旅梅翠鮎凡 選

金融の極意は言わず朝の酒月末が近し利息の夢を見る金融の所 詮月 給 五 千円 金融の所 詮月給五千円印押してからは金庫が重く開き 月給日まで二次会の 金を 長とは金融に馳るものなる 借 v) D. 幸業水水東白久文豆白鮎万 柳米 男平鏡客雀子雄蝶秋虎美樂 梊 踊 子 花

> 銀の柄のくぼみなっかも七回忌 奈 敏の艷無 日な 兄の 癖 を知る 解歴を見せて供出もうすませ なけばないたい 鉄 洗う 引揚げて鍬だこを見る 三 年大望を笑って 長 男 鍬 を持 父逝きてその後の鍬のさびたまい 疎開地の土恋ふ鍬に趣味をもち この世との別れ一ト鍬土を乗 新しい鍬に托してわび住 新築にかこまれ録は錆びたきる 鍬肩に税 更生の義肢にガッチリ鍬を持ち 鍬胼胝を見せて疎開の 鍬の土落とし夕的 做一挺家 高すきる 篤農といは 落陽に鍬をば洗ふあら とれば素人自慢のあるじなり 長を自宅に助へば 植のの の話しをして別れ 庭 野 松 茶園 菜 2 一 向の煙で た人 指 かきま 鍬を 9 ŧ 手をひかり 持光 向 振 b る 2 p, 3 居 5 vJ 4 È ş 沒食子 案山子 のぼる 沒食子 万 青丹子 眞 久路美 珠裥 水雄人 仙鬼

席題 民 市場沒食子選

土に明け土に群したはたの色脱穀機日やけの顔がたち並び農民も牛小屋だけは立派にた農民へ素直にはまだなれぬ地 農民も亦時世の波に搖られて居 草時間は言わず星 ટ 起 色び 亡也 豆美波 紀白 jΕ 笑 凡 同 論莊花秋水女 本 花山子

> 農民の夜なべに俵編んでる貧農と云ふに丸々牛が肥無理を云ふ政府へ農民血が燃 **帰農して五月の麦へ詩を捨てす** 精農の背に十五夜月農民のやはり悩みは税に 土に起き土に暮れたる 完納へ農 鋤鍬を友とし秋を待 農民になりきっているたなごころ 牧獲の予想を胸にた 農して焼けた火阪へも無沙 大 納 得 した 5 が 五 伦 P 丸 Z + 笑 び か え i n 3 è 年額 3 i 没食子 0 史桂竹吞柳方愛方 Ħ 更 ぼる 太 葉楼莊水笶正論正雄生

月

自轉車で魚釣りにゆく子沢山 自轉車をガンジガラメにしてお中食自轉車を笛で叱つたミスポリスー 自轉車をガンジガラメにしてお中食 アベックへ自轉車何ゃらいふて抜け 翌る日は自轉車で來る 忘れ 自轉車の方を気にして話しこみ 冷し飴飲んで自轉車よく走 ラツキーセブン自轉車が垣になり 自轉車の合乗りで走る夜 あきらめて自轉車引 轉車をよけそこなつて苦笑い 轉車の使い気になる 荷 席題 田会風景 「白轉車」 いて帰るなり 橋 0 物 本 物 V) M. 台 綠 雨 鮎翠雀白 交水 兎水 史 竹 花 東 交 踊 美光子虎 蝶鏡子客葉莊村雀 蝶子

自

自轉車の産婆が走 自轉車で來て村医者の親しまれ自轉車がまだ危なげな使いなり 七分吹き自轉車の手がといくとこ 自轉車に積む花嫁の がまだ危なげな使いなり 風あたり 3 · v) 夜の霧 豆沒食子 日武珠 久 Ħ * 滴雜詞

化学式の色 綠蔭にうちの廣告塔見つけ風船ガムの氣球がゆれる五月晴 最後まで読んでナン 廣告の間に 駅 名や 題 f せ 都会に 7 駅 告 告 近くなり + 2 と見 廣 細 清水白 告 か 子選 一小菜貴 花水 村客笑阅 ılı

山小屋に野武士の末の末が住みコツテージやっはり都会の味はかり山小屋で最後の罐を切る 吹 雪山小屋の主の若さが 密かられ

小屋に野武士の末の末が住

家借つてからを箪笥のほしい **僧家あり権利とやらが 五万**

ぼる

六・三のベースで買ふた腕時

山小屋のそこから雪に続く 道 天の川が降ってきょうなコツテージ

貴鮎交旅 青鮎翠 丹 山美蝶 人子美光

傳說を聞く山小屋に吹 雪する しらみ一匹山小屋の 恋視 つめ

落ちそうに山小屋みあげられ

廣告を貼つて 軽犯 罪にふれ廣告の派手も養子にみな任せ 大阪の水 廣告の 文字も 揺れ 廣告は面白い程嘘を書き耐乏の日本に廣告欄廣し廣告へ略図書いてる露路の奥 廣告を信じる妻は言 ひつ の廣告もせず 國宝 に 雨 が 洩求人欄くびの不安に目 を 趙 廣告に家出せよとは書いてな 廣告の派手も養子に みな 任 せ大阪の木 廣 告の 文 字 も 搖 れポスターのウソへ素直な人の群 廣告は信じず意志の まゝ動く 疑瞒廣告一家浮沈の虚をれらい 廣告でいくパトロンをさがらてる 廣告はごれも高嶺の **廣告を見てからキツプ買いに行き 廣告を**信じる妻は言ひつ 花にして 一方 0 幸翠 わ 香柳凡竹豆水梅 噴竹 にばる きら 山兎 男 光 林 笑々

松之助 港の灯貿易船のドラを開掃海も終り輸出の煙を上 貿易再開港のドラも 貿易の艷を出してる竹 貿易の使命にはでな 貿易に嬉し荷

札が風にゆ 貿易は日本を知つて もらふ ナンバ粉とシルク大平洋で逢 席題「買 港によせるぎ 春を 船出 菊沢 小松園選 呼 細

メードイン直珠大平洋を越え貿易へ港神戸に朝が來る 貿易になると思へば手もはづみ バイヤーの関体が來るサクラ時 **貿易はごうあろうごもアルバイト** 輸入した米で生きてゝ子を増やし 貿易は明日の日本をうたぐらず バイヤーへもみ手のくせがまだねけか ABC貿易業が志望なり 貿易にやがて明るい 日本來る メードインジャパン僕等の汗が海をこえ 易再開吃水線は波 する 0 3 CK 4 雀文 獅子 蝶 小翠松 愛豆紀水兎潮貴定案東梅史万香 山 美子雀

席題

霧はれて悲劇を知つた山の小屋山小屋の親切あついものを出し山小屋の親切あついものを出し山小屋で音でで出るので出しまれた。 下賣る

水柳正

ロツテージ見えて口数多くなり山小屋の一夜心細いとも言えず

小屋の一夜心細いとも言えず

友淵貴 Щ

家賃値上破れ型は三年越し借家難つい戦災の愚痴も出る 小説の中に借家が二軒あ借家人犬小屋の前で立止 灯がつけば借家美しし 買はされて借家の氣樂さを思い 雨漏りの借家に世界的学者ほろ醉でかへる我家借家なり 茶の花の盛り借家へ蝶 **贅沢な借家女中とふたりき** やりくりを見せぬ借家の いく借家よもぎを摘んで二人去に ガスの出る借家住居がふとうれし 年借りた家なり出たくなし が背飛の 青 vj V) V) 豆鮎聚剂貴小水方更 万 沒凡 食 生樂子夫

雀踊子

小

小山子秋

山小屋はこんな風にもきづかれて山小屋の記憶辨当だけとなり山小屋の記憶辨当だけとなり山小屋の記憶辨当だけとなり山小屋の恋寝ころんで打開ける

コッテージ若い悩みは猶消えず 山小屋の屋根一杯に雨の音 ランタンの明るさトランプできる色

久米雄 線 線 之 助 風

白

0

ぼる

旅幸

風

由、生きない。つかから遺はせて借家らしからずおがの借家のぞかれそうに灯き 軸・借家なれごも我家燕も異をかける 一**吞**久 米 笑水雄

匂

易

の記念日川 柳 (本社)

六月五日

十三時

だ句から例句を上げて話され、得る所が氣あい~~の内に路郎師の柳話時を詠ん 初夏の風蒸る日曜日新人の顔も見えて和を催した、今月は都合で薏の句会にした 多かつた。 時の記念日を繰上げて五日に本社句会 於 大宝文化会館

じたので路郎師より各柳人に討論柳話何 放されたりして盛会裡に五時散会した。 んでも好いと喋る事を提唱され句会を開 意義な会だつた。閉会迄時間に余裕を生 川雑の盛上る指導性を如実に示した有 蝶

蝸牛·古方·文雄·草々·水客·靜一路·紫香 兎子·忠八·風路·綠雨·美奈子·豆秋·文蝶 光民•香林•里十九•博也•梨里 莊·小松園·玲之介•小柳子 小雅子•鮎美• 司·青丹子·瓜平·白柳子·籌彦·花村·竹 出席者==路郎·愛論·不二鳥·默平·五郎

麻生 路

サイレンに少し遅れたれぢをまき 日覚しはなりやみいびき又聞え 遅刻して悠々ナルダンのぞき込み 更生を誓い見上げる時計 また停まる時計も家の貴重品 独りいる感傷に負けて時計まく 應接間時計ばかりがひどくなり せられた時計は耳へ持って行き 時計組でありしがわび住 台 同忠同花 小文水紫瓜 化松 村園雄客香平

> 農繁期時計止つたま」になり 仰ぐとたん時計の針がちと動き 酔ふた手が標準時計あわしてい 日曜日僕の時計と子の時計 紙貼つて電氣時計でございます 非國民と呼ぶれた日もある金時計 とまってる時計と知らず待ってるる 大阪時間時計はウオルサムを持ち 不良マダムの腕に正確な時を刻む 計脂 すられてき 同同路風豆紫正 小綠

仲よじになれてうれるいランドセル 仲よしが帰ったぁこのオモチャ箱 仲よしがおんなじ服で手をっなぎ 伸よしは上手も言わず歩いてい 遠まわりしても仲よし附いて來る 恋人が出來たが仲より寄りつかず 仲よしは米も持たずに泊り込み 仲よしのトンガリ帽子よくそろい 仲よしのもう婚約を羨まれ 仲よしを二人残して 月が出た 仲よしが晝寢の鼻をつまみに來 **引越しの早や仲のまい子供同士** 仲よしの一人落第してるなり 子飲み明すつもり仲よし提がて来る ミスポリス仲よしの子へやさもい目 仲よしの呼ぶ口笛に 振り 返り 青春の肩すれ/~の 仲の よさ 仲よしと離れとないかくれんぼ わやくちやになって仲よし共倒れ 仲よしの便りに不足 税取られ 兼題一仲よし一 がいつのまにやら恋になり 青丹子 小春女小鬼 小正默小 竹蝸忠 兎 同 綠 竹 柳子公園 雅平子莊牛八子 司 美村莊

二号邸の方の電話は 残し 先電 借特 客の女が長い電話室口紅濃い声が 電話きつちり下 種のいの 兼題「電 礼濃い声が洩れり下駄を揃へられ 戶 話洩 ક 田 ri 方選 紫籌水春

委員長時計のせいにしておくれ秒針に急立てられて お味噌汁時間間や又センマイを卷く時計天智天皇 近 江で 時 計 合す 也

寄豆交 自 丹. 柳 子秋 蝶子

停電に時

計解かに牛を打ち

蘚

仲よしで青酸加里もわけて香 この頃の仲よし一寸貸せぬなり

柳子彦

客香疹客柳

须崎豆 す 美 同 奈子 柳子雨 郎路秋香司

電話口早等帰えんなになる時の声退け時の電話甘へた 声になり 情緒てんめんとして二通話三通話 こみ入つた電話煙草の灰が折れ お隣の電話名刺にすって置き 風呂焚いていまと自宅から電話 葬式屋電話開通知らして來 借り電話すきの包ひもきかされる よろこび近く電話しきりこかいつてき 話一本むかしの場所へ店を開せ かい て る 美 古豆同五春正水默豆五 郎柳司客平秋郎

> 素顔では秘術のほどもつくされず 素顔ふと愛の言葉に

夜の化粧落せば郷愁ひしくへと 法廷に立つた素顔の美 くしく

鲇豆女正豆竹古

美秋蝶司秋莊方

行詰り

陽焦はた素類世間にうち勝てす

痛

互

水豆

客秋

放送は素顔のまって

幕をあけ H

葉櫻に文化の跡よ荒

だ無

梨美揚花揚曄梨花花曄若定

奈 帝 市 美 市 子 市 美 市 子 里

もう葉はかりとなり

ひとり住 る」ま

結婚してから素質の

正本

青すだれかけて噂の中に居る 将は盤出すと一人はすだれ捲く お出入りにすだれつらせて軸をかへ すだれ捲くはずみ風鈴一つ鳴る 傳い歩きする子へすだれ危ぶまれ すだれの恋のいみちくもよたりぬる 金魚の値をれぎってるすだれ越し 蝶がとまつた裏表 小風豆古愛鮎豆默五默白默瓜鮎豆不 粉 柳 二

歯の痛い顔で区役所 判を 押し歯が痛み十二時一時二時と更け 阿倍野支部句會(大阪)

資上げ・葵妓・白海・物忘れ 六月十八日 於 王子神社

賣上げの高を括つて 湯に 浸り 賣上げの小銭数へる 燈 が 暗 賣上げのよい娘の浮氣ほつてをき 賣上げへ残品腐るものばかり 賣上げがへり税がぶ生きて居る 賣上げの百円以下を値切られる 上げが良かつた夜を早く 里沐古紫梅葉不應五

すだれくトンボへ恋をうちあいる

夕ぐれ

声のするすだれの内は裸らし

の自帆すだれを上りて見る

貧乏籤だつたと仲裁 病床の母も笑ろてる物忘れ物忘れ速達を出すことに決め 貧乏籤外野に 此の上は奇蹟を新 貧乏くご酒の工面も 長男と 乗おくれ雨に逢つてる貧乏くじ ストライキ鈴芝蘇は微夜する百円札あつさり出した貧乏 義 物忘れ君と僕とは 物 でぼちんをたいてすき物忘れ 健康を喜ぶ母の物忘れガン首を口にくわへる物忘れ 母と云ふ味方に白痴育てられ 白痴の子あつて遺産が揉めに揉め 散髪をさして白痴をいとしがり 三男が中風の親を背 忘れ いふ貧乏 乏くじ 待合室へ又戻り 用 9 負ひこみれ してい試合 ない試合 から戻り 轁 まれる をひき 路柳万柳紫豆竹鹿は德鮎紫綠文里柳白柳梅文柳水 郎甫樂笑香秋莊路を三

舞台いま造花のサクラ散ってくる流行かそうかと夫とりあわず

美奈子

ュースタイルあれが長屋を出た姿

流行は 芦屋夫人の名に 流行の柄が眼立つてゐるとしま

W

C

北 大阪支部 句會

荷馬車三人とれんげの径を急がない 馬すつと鼻を並べて沸き返り 馬の声馬子のカストリ急かす声 空想はボカー〜馬の春がゆれ 貨車の馬外の景色え足騒きする 石客せてキャンプは遊の仕度する 故郷の石屋かわらめ路石に世を捨てきれ 音を立て ぬ尼の下

維川 女 性]1] 柳 會

定 美 (大阪) 報

膝枕雨も明治の音がする雨だれにリズムがあるの知る孤独 傘の中今日も別れの 握手 だけ こうですと雨の風さな手で示し 金づまり女房一本つ けて こちらさんまでがと思ふ金っまり 雨やごり仁王の埃り見てゐたり 手の平にこれなら行ける雨を受け 日航笠雨あくまで も 細く 降り 雜川 金づまり·思出・土産 六月十二日 東京支部 一句會 於 鳥野寮 (京京) 好不山白不白好除不

郎二楼星二星郎

白痴の子爪をかみく、帰つて來 旧家の奥の奥で白痴の子が生れ 親の眼のそれほご馬鹿と思はれず アギウギへ白痴ニンマリ 一数者手切の金と知 つて 美香雨螺丸袋兔篓里螺甫客鬼三九 色あせていよく〜造花らしくなり流行を貫ふパトロンがついてゐる流行を買ふパトロンがついてゐる流行を街のカメラに 掮 へら れ流行の患 哀 借 金 だ けか さ み 流行もくでもあるかと兄にらむはさんの 調子 が 違ふ 流 行 歌流行が変り 仕 立屋 また 儲け

(大阪)

ころですと登はちらと

灯をさるし

六月十九日

於

若

菜居

あすはもう皆死んで ゐる 螢 とつぶりと暮れて強が数へられ

籠

n

若定梨茂定梨

菜美里乃美里

籠もう終先で忘れら

• 馬 · 苔

來ぬ人へ日命つかれた廻りやう

傘屋が派手に廣げて 夏

近

i

一匹の螢を街の子が

かこみ

俗名にふと 苔を見し 墓 参り障子あければ御先祖からの苔の庭 白 万 水 青 紫 水 春 吞五水 柳 丹 水樂客子樂客子香客水

柳の芽素顔の傘をさして似る幾屋口素顔が見たいファンカリ

ブギウギの素顔になって子をあやし

眼鏡越しの素顔を見つけられ

不水紫正豆水草

たすきがけ淡者は晝の顔を出し 富田家の灯がなつかし

い左

莊郎烏客香司秋客々

里梅鮎

下 郊九里美

すだれ越し心づくしの胎が見え すだれ巻きく人及陽の景を教へられ 嬢さんの恋を見附せれずだれ越し 氷屋はすだればかりで店が出來 闇米はいらんかとすだれから覗き すだれ上げたとたん風鈴鳴りはじめ すだれ越上川の向っはネオンつく

水正紫

当ばなしになると藝妓も世帯じみ 悪友の電話資上げどめたとこ

万

母親に燕妓くだ卷きながら寢る 本心をつかれて奏妓 泣き 崩

グラビヤ に昔の名妓倘若

L

水豆德葉柳

賣上げの中から母がくれるなり

愛上げで拂ふつもりが雨となり

賣上げに氣兼ねしてゐる女店員 賈上げ高みんな利益の様にみえ 質上げをつけつけ酒のかんをさせ

変上げがごうであろうで夜食出し

松風とすだれと俺も 年 をと

水 谷鮎 v)

美

素類もう四十の皺がかくされず 裸体画を素顔で許す身になりぬ 約束の時間きつちり素額でき 素顔にりほくろがあって親しまれ

竹五

藝妓もうあんな旦那はちやいとてる

二号から元の夢妓になりさがり 切れたこて養妓は養妓の意地を立て **垢投けしてまだ泥水をぬけきれず** まゝ母にまた入揚げる燕妓なり

真剣になるを感者はも

7

葉機の庭はピアノも

聞えます

花代子

枚目の素顔やつばり美

愛情の手と手まんく

\ ご春を生み

入試門ここにもボスの額が効き 禿上げた額を

漫画によくつかみ 無理をした寄附で町内の額を立て 手入れした顔ではあるが氣に入らず

まじない屋お礼包に氣をとら

人のおかげで旅の氣がまぎれ 一人となる日も近しインフレー

うた子

口取を土産に無事な我か家の灯 お土産をれだる女給の握手なり ひやかして置けはよかつた土産買ひ ビヤホール子供の土産少し濡れ 里からの土産で三日食いのばし 思ひ出の写真貼らずに別に持ち 思ひ出は抱かれて死んだあの女 課長の思出で話いつももてたこと 小僧ひま主人忙しい 金 づまり 棟上げのまゝはかごらぬ金詰り 無駄足はお互ひ様の金づまり 雨後亭 天三坊 白 不圭不登隆 雨 後亭 \equiv

古川風竹 ウイロー社句會(ハワイ) 一周忌記念(四月) 古川魔花 麗報

WINDMILL風が吹からが吹くせいが校長が風の 健りに 闇屋 とか 同 雨か風か鉄幕なほも搖れてゐる 風鈴の音も凉しき開けばなし 没落の顏は風邪でも引いたやう 竹折れて想出つきぬ風の夜 裁合の風をよけるに座り更へ 風邪に寢る氣の晩酌は遠慮せず 風が出てお重の中も花吹雪 魏を忘れて春の風に居る 呼びすて、家風に合はぬことはかり 風の便りで聞いたと無心狀が來る お好みの屛風の 絵竹に虎 快磯潮泉草笑夢一曉友河夢 一 斃 起朗風水郎有子浪舟郎舟 曉友河

雜川 出 璽 支 部 句 會 (出雲)

薄情に馴れて師走の 風

流に立

花•煙草•淚•手 四月十五日 . 於 人和紡

お互に手ばかりみてる見合です花びらの舞び込む朝の窓を明け 花などを活けて婚期の春をゐる 煙草の火貴方はごまでお乗りです 啖呵切る時の煙草は深く吸 大謙さ独線孝 り 之 り 一 だ 仙 助 弘

顔に似ぬ度胸は矢張り親ゆづり

十四九大

婚の蚊帳を縞蚊はまわるだけ

食うこと着ることうかつな涙して 今日も又又手を汚す自轉車 居残りの手がまだ寒い花ぐもり 温情は涙となつて受けてゐる 二本目を大きく吸うて事務多忙 煙草吸ふ夜の の手が Ė か. 兵太郎 茂都子 綠 壽 悅 心之助 雄 年朗

大牟田支部句會 (大牟田)

华年 種・改良・椅子・学労・御飯粒 月十日 富 H 葉報

半分は場慣れのつもり受験する そろばんが牛分覗くランドセ 半分は拂ふ気紛失他 びに來る 椅子三つ並 べ 当直 半分は嫁にも聞かせる叱りやう 学童の椅子を並べた父兄 理髪屋の椅子が廻つた男振 口笛も軽く改良の棚が 改良をしたか故障は請け合へぬ 地下道へごろ寝で特種とるつもり 喫うだけでまた特種の見つからす 会 天

半ズボンの裾を縞蚊は見逃さづ 御飯粒母の躾がうなづかれ 飯粒の顔でおごける 子 の 眞二つに分けても子供見比べる 配給の酔いへ無情な蚊が攻める **飯粒で商賣繁昌の護符を貼** 新参のとらかく箱で飯にする **廿貫部長は椅子が少さく見え** 元氣 v) 水

> 雜川 六月八日 部 句 會(山口線) 不二俱樂部

湯吞・殘・刺類・のご自慢

同権へ鯉

触ちと異議がお

1]

戦死した息子の鯉もカーテンに

び和 齊 ろ 子 子 花

鯉幟さつきの風が

通

vJ

拔

あかへんと知りつ・まじないやってみる

ひろ子 無

鬼

まじないが利いて税金安くなり まじないが利いたか上役席をたち

あこがれの瞳へはにかむワンピース 若い頃使うたらしい の ご 自 遠縁になると話の上手なり 成功が知れて親類日白 親類が來てほしくない金が出來 **縁談は先づ親類を見てかいり** バイヤーへ從兄弟の從兄弟あいに來る 親類のはしてれも居た一七日 女房の親類と 残された客バスの尻ジット見 残つた薬も指へ入れてやり 熱弁は湯吞のあるを 意識せず 友達の一人は湯吞へ注ぐビール 行く本願寺 押し 亚 太郎 鄉休鄉人休東駕三城鄉

篠 Щ 支 部 句 會 (兵庫縣) 商賣を問われて言えぬのご自慢

五月二十八日 於篠山配電局階上

小 西 無 鬼 報

狂人・まじない・鯉

釣の友なかく、釣場口にせず 狂人とわらへばわら へ 学 狂人の真似などしたろかと思い 狂人にもせめてもの帶しめてやり 釣り上げたとこで双方話しかけ 釣り掘の釣れぬは默りこくづてる 釣場ではアキマヘンナーが返事なり 今日も亦つられて帰る氣の永さ 糸たれて心やわらぐ 父となり いでたちは太公望もかくあらん 所釣の獲物を焼く匂ひ 究 0 とほる ひろ子 こよこ とほる 花 学 祀 四

> 雜川 下 關 支 部 句 會 テ関 市

鮮かにチャにやられた。春 來賓の長い祝辞へ燗がさめ 子を叱り嫁も叱つて平和なり 子に留守をさせて借金拂わぬ氣 豆蔓が駅長 駅賣りの変る訛りも 切り過ぎたなごと外科医は言はぬなり 室 ~ 0 無事な 77 7 7 0 旅 九呂平 不 九 呂平 水

郡 支 部 句 山

雜川

小

П

長: 野 # 蛙 報

たばこ・粉棋

急患へ駒持つ医者 妥協点やつど見付けたたばこの 長との將棋二度目は負しておき 0 尼重

寫

二五町田芝区北市阪大

番九三六一 島福 話電

編輯 室にて

なやみが、それ以上でありながら ある。そして、その心もちを、あ うほごつき詰めた心になるもので は、いつそやめてしまおうかと思 待ちに待つている人たちにとつて なやみである。殊に、その発行を その方法もつかぬこともなからう 的で毎月続刊している雑誌なら、 として電大なこころで末長く読み 或る意味に於て不可抗力の遅刊だ ごうすることも出來ない選刊は、 まりにもよく知つている編輯者の ▼雑誌が選刊すると云うことは、 続けて欲しいのである。営利が目 人の問題でないだけに、大きな

> ではない。何れにしても私は原稿 八日が來ても、川柳から退くわけ よい後継者の出てくれることをの る。自分も、まだ老墳と云う年で 紙の上に仆れる覚悟である。 ぞんでゐる。尤も私が編輯から退 編輯にあたる訳にも行くまいから いるが、しかし、そういつまでも もないので、編輯にガン張つては

を感じた▼「女流作家は語る」は女 案じていただけに二重のよろこび の奇禍に遇けれたのではないかと 就ての考察」が届いた。廣島爆響 石氏から、「誹風柳多智の題名に 拙吟の掲載をオミットしたりして 寄せられた。▼從來編輯の都合で することにした。▼阿達養雄氏は 発展するのではないがと思い開催 流作家の接頭がこんなところから 「中万字屋の玉菊と玉菊燈籠」を 最近では川柳塔へ載せる

るので思うだけのことが出來ない 川柳講座」の方が、これ又編輯の 困つたことである。しかし思うだ 時間で例句なごの採集をやつてい つた。限られた誌面と、限られた 都合で、載せられぬことが多くな 何んとで もゃって行く残りであ 自身が一番よく知つているので、 やうな性格の特主でないことは私 に困つて手をこまぬいていられる ると筆には書いたものの、ホント ないことになる。困つたことであ るのだと氣づけば、なげく必要も そこに人生の面自味がひそんでい かして可能にしようと努力する。 のことが出來ないから、何んと

しに懸命である。病人が健康を取うしたなやみを続けて、還刊取及

験することである。本誌も今、そ を出して來た編輯者なら誰でも経 とは容易でない。これは長く雑誌 と、その巡刊をとり戻すと云うこ は、何かの支障で一度選刊をする

必要なやうに、雑誌の選刊も、寄婦や、附添や、身辺の者の協力が **戻すために、医者や薬劑師や看護**

者や印刷屋や紙屋の協

飯) は毎号のやうに

趣味と教養の殿鴬

洗後感を寄せられて

度の遅刊は大会の雑務と、印刷事 力が絶対に必要なのである。こん

情によるものであるが、理由を詳 しく述べて見たところではじまら

る。こゝ二三年のうちに

司氏(貝塚市)は大

御べんたつを乞う。 沿うだけのものにする積りだ。 (路)

文化部川柳会は六月廿一日午後七 で開催▼大阪警察病院表木分院川 館で開催▼川雜阿倍野支部句会は 海鉄道川柳会では六月廿三日午後 時半から 宝文化会館で開催▼南 柳会は六月七日開催▼南区医師会 六月四日午後二時から三階図書室 社で開催▼大阪逓信病院川柳会は 六月十八日午後六時半から王子神 六月五日午後一時から火宝文化会 京支部は六二十二日島野祭で開催 以上何れも路郎主幹出席▼川雜東 五時半から羽衣駅合宿所で開催、 月三十日に日立造船で開催黒川紫 山雨楼氏出席▼川雜櫻島句会は六 香氏出席▼白鷺川柳 主催の時の記念日川柳会は

▼敗戰後消息を絕つていた石崎柳

様夏祭に川柳祭を開 ではヒル十八日和鷺 **削川柳社(岡山縣)** て開催される由▼弓 柳大会を樹甫居に於 三日に一周年記念川 会(姫路市)では七月

章道

(小原流・未生産) (流・花月雁流・宗徧

B

を募る。

『近作柳枝』

は一般作家の雑吟

員に限る。

『川柳塔』

0

投句は不朽洞念

茶道

ことにしたので毎号出すことが出

來るやうになつた。その代り「続・

が、営利を目的としていない雑誌

の立場から、出さえずればい」と

を出したいのである。そのために い。出す以上は力のこもつたもの 云うお座なりの雑誌は出したくな

催、農民の父河原善 郷土の先覚

めに特別課題として 片山潜を顯彰するた 作句されるとのこと 材係長に轉じられた 機部労働係長から登 縣)は國鉄の高砂工 ▼長宗白鬼氏(兵庫

> 層の関病を祈る。 分容体が思はらくないららいが、

> > 慕

集

段の例句、 「やはくくと」に訂正。 「弁当と」とあるは、

文章(評論・研究・感想其他)

Ш

柳

塔(雑

詠) 麻生路郎選

作柳樽(雜詠十句) 麻生路郎潤

ひたい。 句主は至急住所姓名をお知らせ願「都会から顏を改良して戻り」の

に訂正。 では「燦々と」は「燦々と」 その通信いら想像し得られる。一 筆力も元氣も落ちていないことは 段十一行目「庭のし」は「庭の苔」 **六月号「各地柳墩」一四ページニ** の例句、「はやくと」とあるは 五月号「続川柳講座」三ページ上 「弁慶と」に訂正、同じく三段目 IE. 配 誤||

ピンポン(十句)上田翠光選

(九月五日稲切)

友人

(十句)古川魔花麗選

(八月五日編切)

課題吟募集

投句は各種必ず別紙に認め、

ſŧ

定

所氏名雅号を明記する事。

七階文化クラブ事務所へ Made in occupied Japan (戴轉禁)

詳細お問合せは

昭和廿四年六月 発行所 大阪市住者至可代西五丁目二五香地 大阪市住吉區方代西土丁目二王番地 行印刷人 11: 一日発行 幸

柳雜誌 舞雪中窓 大阪 七五〇五〇

電解一一七一番大 阪 日 本 橋

一ケ年概算 册 (送料三四) 金三〇四 号巻

長唄・小唄・艦曲 手奏・古典・新舞踊 等曲・要果 洋穀・書道・日本書

服師デザイン

B列5号 毎月一 П 日 発

和廿四年六月廿五日印刷 金三九六円

ŘΚ